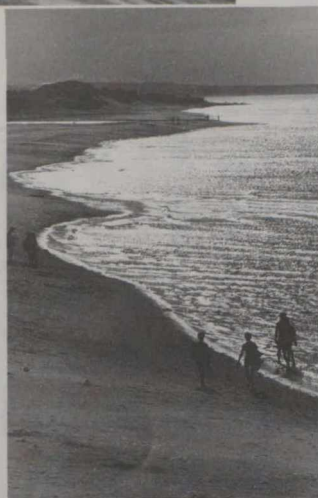


プリンス・エドワード・アイランド州

プリンス・エドワード・アイランドの村。



キャベンディツシュ・ビーチ

ポテトに次いで大きいのは、酪農製品。穀物は自給自足態勢にあり、またかぶやカリフラワー、ブロッコリを中心とする

他州ではなく、米国が主な相手であったが、「ナショナル・ポリシー」ゆえに州の経済が停滞した、と考える人はいまもいる。確かにPEIは経済的にカナダ全体から取り残されたが、それは「ナショナル・ポリシー」のせいというよりは、技術革新や市場からの距離などによるところが大きいだろう。いずれにしても、経済的な苦境の中で、若い男女は島を離れ、残った人々も貧しい生活を強いられた。状況は戦後、若干良くなったものの、それでも一九六六年には連邦政府が島全体を後進地域に指定している。

島の最大の収入源は農業。土地はもともとよく肥えているが、川や湾で簡単にとれる海藻や貝、かきなどが土壌をさらに肥やしてくれる。主な作物はポテトだ。PEIは、長い間、米国やヨーロッパ、中東、あるいは南米向け種ポテトの重要な供給地となっている。一九八四年には、二万八千ヘクタールにわたってポテトが栽培された。価格にして、推定一億ドルである。

州政府は、シャーロットタウンやサマースайдに工業区域を設け、また中小企業向けに優遇策を導入するなど、製造工業にも力を入れている。ファッション衣料、電子機器などが、州の工業製品とし

野菜もたくさん生産されている。(日本は、毎年、数百万ドルにのぼる冷凍野菜をPEIから輸入している)。換金作物としては、ほかに、タバコなどがある。

漁業は、十八世紀に盛んになった。最大の水産資源はロブスターで、一九〇〇年には州の全漁獲高の半分を占めるほどだった。ロブスターは現在でも漁業の中心だが、ロブスターの閑漁期にはタラ、赤うお、ヘイク(タラの一種)、フラウンダー(ヒラメ科の魚)などの底魚、サバ、ニシンなどの回遊魚、あるいは帆立貝を捕獲する。ブルーフィン・トウナ(本マグロ)をねらう漁師もいる。本マグロは、ほとんどが日本に輸出されている。

いま期待が寄せられているのは、カキの養殖。カキの卵は州政府のふ卵場でかえし、養殖場へ送られる。帆立貝やムラサキガイ、ハマグリ、マス、海藻やハズツノマタ(これから抽出したカラジールハンは、食品の乳化剤または飲料の清澄剤として用いる)などの養殖も可能になった。

第二次産業は、農産物や水産物の加工が中心になっている。ただ最近では、クロスカントリー用のスキー、グラスファイバー製ボート、印刷、金属加工、高級食器、乳製品といった、軽工業も盛んになりつつある。

州政府は、シャーロットタウンやサマースайдに工業区域を設け、また中小企業向けに優遇策を導入するなど、製造工業にも力を入れている。ファッション衣料、電子機器などが、州の工業製品とし

世界的なポテトの産地

プリンス・エドワード・アイランドは、日本では「赤毛のアン」で有名だが、世界的なポテトの産地でもある。

カナダは、オランダに次ぐ世界第二の種ポテトの輸出国。その六ないし七割はこの小さな島で栽培されたものだ。ポテト畑は七万二千エーカー、年間産出高は七十万トン(価格にして約七千万ないし一億ドル)。人口わずか十二万余の島の最大の収入源である。ポテト産業は、袋作りから輸出取引にいたるまで、州経済を支える柱となっている。

南米アンデス生まれのポテトが、プリンス・エドワード・アイランドで栽培されたのは、十八世紀のことである。フランスでは一七六〇年代にポテトが普及しており、当時フランス植民地イール・サン・ジャンとして知られていたこの島にも、そのころフランスからもたらされたのだろう。今では、島中、ポテト畑だ。

十九世紀に入ると、隣りのノバ・スコシアやニュー・ブランズウィックにも種ポテトを輸出するようになり、一八三〇年代にはポテトが島の主要輸出品になっている。

マーケットは、カナダ国内や米国をはじめ、世界各地にまたがっている。日本にも昨年、売り込みのためのミッシェル・ジョジがやってきた。